

スピッツ！

ゆひ



## シロクマ

---

期末テストが終わった。

おそらく成績は中の上くらいになるはずだ。  
ダメだと思ふ感覚と、ばっちりと思ふ感覚のズレがあまりないとき、  
ぼくの成績はだいたいいつもそんなところに落ち着く。

勉強は好きでもないし、嫌いでもない。  
いわば歯磨きみたいなものだ。  
だからこれといって疲れたりはしない。

でもテストは違う。  
同じ歯磨きでも、何も食べてないのに、  
歯磨きを強要されるような、そんな感じなのだ。

そんな歯磨きが終わって、いや、テストが終わって家に着くと、  
無性に炭酸が飲みたくなる。  
もしかして大人が仕事から帰ってビールを飲むのって、  
こんな感じなんじゃないだろうか。

そう思って、冷蔵庫を開け、  
シロクマの絵が描いてあるビールを手にしてみた。

それにしても何でシロクマなんだろう。  
シロクマがビールなんて飲むわけないのに、  
その絵とビールはすごくマッチしている。  
これを最初に描いた人は、表彰ものだと思ふ。  
こういう絵を描く時間はきっと歯磨きではないのだろう。

そう思って、ビールのかわりの、サイダーを開けた。

「ぶふあ〜」

それ以外の文字はありえなくらいの勢いで、  
そんな擬音を口にしたあと、ソファに寝転んだ。

そうしてるとき、母親が帰ってきて、  
びっくりしたように、「あら、帰ってきてたの、おかえり」とぼくに声をかけた。

「ただいま。かあさんもおかえり」

ソファでグダグダとなりながら、返事をした。

「ただいま。テストどうだった？」

「いつもどおりだよ」

その返事もいつもどおりだ。

「いつもどおりって、それはいいけど、もうちょっといい点取りたいとか、  
そういう欲はないの？」

おおきな世話だ。

「ないよ」

ぼくは素直に答える。

「ほんと欲ないよね、昔からさ。親としては手がかからなくていいけど、もうちょっと情熱的になってもいいと、かあさんは思うけどなあ。勉強じゃなくても、部活とかさ、友情とかさ。はやりの草食系ってやつ？」

部活も友情も、自分なりに情熱的にこなしているのだけど、どうもそれは伝わっていないらしい。まあいいかと思ったけれど、それで草食系とくられるのは腑に落ちない。ぼくはささやかに反論した。

「草食系って、恋愛に積極的じゃない男のことを言うらしいよ。別に欲がないのが草食系じゃないでしょ。肉も食うし、おれ」  
「え？ 恋愛には積極的なんだ？」  
「そうだよ、おれなんかが待ってたって、誰も来ないんだから、こっちから行くしかないでしょ」

そう言ったけれど、1度告白して振られた経験しかぼくにはない。そしてそれ以来、怖くて告白なんかできない。

そういえば。

振られたその日、夜中に冷蔵庫をこっそり開けてビールを飲んだ。あのシロクマの絵が描いてあるやつだ。一口飲んだだけで、ビールは苦くてまずいとわかった。あんなものを飲む大人の舌は、きつといかれてしまっているんだ。そう思いながらも、ぼくはそれを飲み干した。

そして、一晩中泣き続けた。

そのときのことを思い出すと、胸が痛くなったしかたない。あれ以来、告白したその子とは、学校で会っても気まずいままだ。それまで友達だったけれど、ぼくらの関係はそのとき壊れた。壊れたまま卒業していくのだろうか。それは愛を学ぶための卒業だろうか。

ビールが苦いように、人生も苦いものだ。苦いビールが好きな大人は、苦い人生を楽しめるのかもしれない。それが大人になるってことか。だけどぼくにはそれはまだ、苦いだけのものだ。

ああ、だめだ、やっぱり胸がいたい。

ぼくはソファに顔をうずめた。

「なんだ、男らしいところあるじゃん。でも、やみくもに押すだけじゃ、だめよ。女の子の心は卵みたいに繊細なんだから」  
「なにそれ。あー、シロクマになりたい」

卵みたいに繊細なのは、思春期の男子だって同じだ。事実ぼくはこうして、歯磨きと失恋でボロボロじゃないか。

「シロクマ？」  
「そう、シロクマ。ビール飲んで星をながめる、シロクマだよ」

ビールのカンに描かれたあんなシロクマになってしまいたい。

「それ、似合ってるかもね。あんた、優しいから」

優しいだけじゃだめなんだよ、かあさん。

「とわくんはやさしいけど」。  
その言葉のあとに振られたんだから。

ソファでうずくまっていたまま、  
手を伸ばしてテレビのリモコンのスイッチを押してみると、  
ニュースが流れた。

温暖化で、北極の氷が溶け、シロクマの生態も変わりつつある。

そんなことを言っていた。

優しいだけじゃだめだけど、とりあえず地球には優しくしようと思った。  
大人になって、ビールを飲みながら、星をながめられるように。

サイダーが、優しく喉を潤した。

## 僕のギター

---

それはジブリ映画の「耳をすませば」に出てくる、  
「地球屋」のようなアンティークショップだった。

その店のウインドウに飾られたギターを、  
ぼくはいつもながめていた。

年代物の高いギターで、  
当時高校生のぼくが手を出せる代物ではなかったのだけど、  
それをながめているときは、少し高尚な気分になった。

まったく子どもらしい想いと、今では思っている。

彼女と手をつないで歩いているとき、  
それと似たようなお店を見つけた。

ここはぼくが高校時代を過ごした場所ではなくて、  
1000キロメートルも離れた町。

彼女と出会った町だ。

だから、あの店ではない。

なのに、ふとあの時と同じ匂いがして、  
その店のウインドウを同じようにながめた。

そこにある年代物のギターは、  
大人になった今でもローンを組まないと手が出ないような代物だった。

「高いんだねえ、ギターって」

彼女は手を離さずにそう言う。

「まあ、ピンキリだよ。安いのは安いよ」  
「そっかあ。部屋にあるギターは安いの？」  
「うん、安いよ。バイトして初めて買ったギター。確か、2、3万くらい」  
「へえ、違いがよくわからないけど」

まあ、そんなものだ。  
音色も質も全然違うのだとぼくはわかるけど、わからなくても問題はない。

そう思って、じっくりながめていると、  
彼女はぼくの顔を覗きこんで言った。

「なんか、好きな芸能人見ているときみたいな目してるねえ」

よくわからなくて、「え？ なにそれ？」と笑った。

「私、ちょっと嫉妬してるってこと」

そう言って、彼女は手をぎゅっとした。

ぼくはつぶやくように、

「憧れは、触れないから、憧れなのかもね。  
だけど、初めて買ったギターはもう、離せないわけだよ。  
うん。わかる？ 言いたいこと？」

と、うなずいてみた。

「うーん…… なんとなく……」

ぼくは空いている手を、彼女の頭にのせて、

「きみのことがめっちゃめっちゃ好きってことだ」

と、言った。

「私って、2、3万？ 安上がりな彼女だね」

そう怒ったふりをしながら、彼女は笑った。

「これほど大事な2、3万もないよ」

納得したのかどうかぼくにはわからなかったけれど、  
彼女がぼくの手を離そうとはしなかったのは、ほんとうだった。

## 砂漠の花

---

「みんなと過ごす時間は短いですが、いい思い出ができるといいです」

ぼくはいつも同じようにあいさつをする。

けれど「いい思い出」が増えると困ることを、ぼくは知っていた。

転校の多い子どもがみんなそう思っているかは知らないけれど、

「めちゃくちゃいい思い出」が今でもぼくの胸を苦しくさせている。

そんな思い出が多いほど、別れはつらいのだ。

だからあるときからぼくは感じ方を変えるようにした。

「めちゃくちゃいい思い出」になりそうなとき、ぼくは人と少しだけ距離を置く。

そうすると、それは「そこそこいい思い出」になり、別れのときの痛みは、少し減るのだ。

そうやって予防線を張ることを、ぼくは自然と覚えていった。

それでも、「いい思い出ができるといいです」と言うのは、

とっつきにくいやつとは思われたくないからで、

その一言は極めて有効なのだということも、ぼくは学んだ。

そうやって転校してきたこの学校でも「そこそこいい思い出」ができ、

ぼくはまた次の学校へと転校する。明日は、別れのあいさつをしなくちゃ。

まあ、いつものようにだな。

そんなことを思う帰り道。

少し手前に、クラスメイトの河原よしえが歩いているのがわかって、

視線を彼女の肩のあたりにやった。

彼女の肩にかかる髪が少しだけなびいている。

それが、なんとなく好きだとぼくは思っていた。

少し距離を置かなければ。そう思って立ち止まったとき、

彼女のかばんから、何か紙のようなものがすべり落ちた。

彼女はそれに気づいていない。

ぼくはとっさに、そこまで走って、それを拾い上げた。

手紙だ。

彼女は少し前を行っている。何の手紙だろう。

気になっていると、彼女が振り向いて「あっ」と声をあげた。

ぼくもそれにつられるように「あっ」と声が出て、それから、

「これ、落ちたよ」

と告げた。

河原はそれを黙って受け取ると、ぼくの制服の袖をつかんで、歩きだした。

「え？」

おどろくぼくに、河原は「ごめん、ちょっと」と告げて、どんどん引っ張っていく。

「ちょっとって？」

河原は「ごめん」を繰り返して、少し先にあった公園までぼくを連れてきた。  
やっと袖を離すと、彼女はブランコに腰をかけ、顔を覆った。  
仕方がないので、ぼくも隣のブランコに座った。

「中身、見た？」

手紙のことかと思い「見てないけど」と答える。

「そっか..... 私、ふられたの」

なんと答えていいかわからないので、

「手紙で？ ”フラレター”ってとこか」

そんなことを言っていた。

「なにそれ、笑えないよ」

それもそうだと思った。

「よしおかくんは誰かを好きになったっことないでしょ」  
「そんなことないけど」  
「そんなことあるよ。本気で好きになったことあるなら、そんなふうにはちやかさないはず」

河原は冷静な口ぶりで、そう言った。

「そうか、ごめん」

少し気まずくなって、ブランコを揺らしてみた。

「.....明日、転校だね」

河原もブランコを揺らした。

「うん、まあね」

「まあね、って、淋しくないの？」

「淋しいけど、仕方がないし。それに別れには慣れてるし」

「慣れるものなのかなあ..... ふられるのも」

「それとこれとは話が違うから、わかんないよ」

「同じだよ。きっと慣れるものじゃないよ。よしおかくんはきっと、怖がってるんだ。  
怖がって人と距離を作ろうとしてる。そしたら、別れるのもつらくないから。違う？」

違うとは言えなかった。彼女はぼくを見抜いている。でもだからって.....



「出会うことが別れることだとわかってても、そう言う？」

「言うよ。たとえ別れても、私は人と出会ったり、好きになることを選ぶよ」

彼女の言葉に強い意志を、ぼくは感じた。

「そうか。河原は強いな」

「強くなんかないよ……。ただ、なんか悲しくなった。

せっかく仲よくなった人に、別れるのがそんなに淋しくないなんて言われたら」

「それは、ふられたひとのこと？」

「違うよ。よしおかくんのことだよ」

ぼくは特別、河原と仲よくなったという自覚がなくて、そう言われてもピンとこなかった。

ただ、河原の肩にかかる髪がなびくのが、好きなだけだった。

けどもう、ぼくはわかってしまった。

こうして距離を縮めてしまったことで、明日転校することが、悲しくなるということ。

ほら、だから、ダメなんだって。ごまかすように、ブランコを思い切りこいでみる。

河原も同じようにそうした。河原がぼくといえるのは、たまたまだ。ぼくがそこにいただけだ。

それでもいいからもう少し、この時間が続けばいい。どれだけ別れが、つらくとも。

ブランコは永遠のように、揺れ続けた。

湖のほとりに車を停めて、ぼくらはさっき自販機で買った缶コーヒーを口にする。

「絶対、"あつい"と表記するべきだよな」

彼女はそう言って"あたたかい"缶コーヒーをドリンクホルダーに戻した。

「うん、でも徐々に冷めていくと、ちょうどいいとも言えるしな」

徐々に終わっていくこの恋は、なんだかちょうどいいなあと、ぼくはぼんやりと思った。

ゆらりと揺れる波音が鼓動のように漂っていて、助手席の彼女も、同じリズムで揺れていた。

「あたたかいのが冷めていくのは好きじゃないけど、

熱いのが冷めていくのは、いいかもしれないね。

でも、ずっとあたたかいのってあるのかな」

腕組をして考え出すと、彼女も同じ体勢になり、

「どうだろうねえ」

と、ルーフを見上げた。

「あ」

抑揚なく、彼女はそんな1文字を吐いた。

「どした？」

「さかな、いた」

「え、さかな？」

ルーフを覗いてみたけれど、そこには魚は見当たらない。

「うん、いた。っているわけないか、見間違いかも」

彼女はあっさり言葉を取り消した。

ぼくは気になってしまい外に出た。

そして車の上を見渡したけれど、魚はそこにはいなかった。

「見間違いだよ」

缶コーヒーを持ちながら彼女も車から出てきた。

「空にさかながいたらおもしろかったのに」

と言うと、彼女はぼくをバカにしたように笑った。

「いるわけないよ」

「いたって言ったのそっちだろ？」

ぼくもバカにしてみると、「そうだった」と今度はちいさく笑った。

外は少し寒い。手をさすっていると、彼女は持っていた缶コーヒーをぼくに差し出した。

「これ、あったかいよ」

それに手を当てて、暖をとる。

それはもう熱くはなくなっていたけれど、ちょうどよくあたたかい。

ほうっていたら冷めるけど、ほうっておかなければあたたかいままでいられるだろうか。

彼女も同じことを、思っているだろうか。

波音はただ、鼓動のように漂っていた。

# ガーベラ

---

「おれのこと、覚えてる？」

かかってきた電話に出ると、彼はそう言った。  
私は静かに「うん」と答えた。

私は夕暮れの町を散歩していて、  
道端に咲いたガーベラを見つけたところだった。

それを写メに撮ろうとしたとき、  
ケータイがブルブルと震えたのだ。

電話の相手のその人はかつて、私の「兄」だった。  
でも私は「お兄ちゃん」と呼んだことは1度もない。

私が高校生のとき、母が再婚をした。  
再婚相手の連れ子は、私より10も年上の男だった。  
彼は私の兄になったのだが、  
そのとき彼はもう独立していて、ほとんど会うことがなかった。

そして、高校を卒業するころ、母は離婚した。

つかの間だけ存在した「兄」は、  
いとも簡単に私の前から消えたのだった。

私は彼とのあいだに、1度だけ過ちを犯した。  
まだ「兄妹」という関係のとき、  
彼と寝てしまったのである。

それは、思春期の興味本意というか、  
はやく処女を捨てたいという理由だけだった。  
「周りにいる、安全で手ごろな大人の男はあなただけだ」と、  
私は行為に及ぶ前、正直に言った。

今思えば、彼にとっても都合のいい話だったのだろう。  
それでも彼は神妙な面持ちで、その言葉を受け止めた。

そして、彼は信じられないほど優しいやり方で私を抱いた。  
これが錯覚だとしても、私は彼を好きになってしまうだろう、  
そんな思いに駆られて、私はその最中、小さく泣き続けた。

私たちはそれ以来、会うことはなかった。

こうして電話で話すのは、本当に久しぶりで、  
それをどんなふうを受け止めていいのかわからなかった。

「もうおれらは他人なんだけど、君には伝えたいと思って」

私はそのとき第六感がどこにあるのかはっきりわかった。  
彼は私を揺さぶる。間違いなく、そういう類いのことを口にする。

そう、わかった。

「いいよ、言わないで」

弱々しくそう抵抗してみるけれど、  
彼はすぐに言葉が続けた。

「結婚するんだ」

ほら、やっぱり。  
私は予想通りに揺さぶられた。

「そうなんだ、よかったね」

強がるけれど、  
私はあのときのようにまた、  
小さく泣き続けてしまいそうなる。

「ありがとう。君に、そう言ってもらいたかった」  
「どうして？」

そんなこと聞きたい訳じゃないのに、そう言葉にしていた。

「覚えてる？ 一度だけ君と夕暮れの道を歩いたことがあったよね」

それは、あの泣き続けたあとのことだ。  
彼は私の手を引いて、外へと連れ出したのだ。

「うん、覚えてる」

「あのとき、君はふと道端にしゃがみこんだ。また泣いてしまうのなって思って、  
君の頭を撫でようとしたら、君はガーベラの花を見ていた」  
「ガーベラ……」

そのときの記憶が、何枚もの絵のように連なってよみがえった。  
それを彼は言葉に変えた。

「そのとき、おれはなんてことをしてしまったんだろうと、ものすごい後悔をしたんだ。  
そんなおれに、君はそのガーベラを摘み取って、おれにくれたんだ。  
そのとき、君を守ろうと思った。でも君は”さよなら”と言ったんだ」  
「うん」

そうだ、最後の絵がその場面を描写している。  
好きになったら、この恋は終わる。  
私はそう思った。だからそうなる前に、恋をするのをやめた。

「ずっと言えなかったけど、おれも言わなくちゃならないね」  
「そうだね」  
「さよなら」  
「うん、さよなら」

私はそう言葉にしたあと、すぐに電話を切った。  
全身が泣きたがって仕方がないからだ。

あのとき終わったと思っていたけれど、  
私はずっと恋をしていた。  
会わなくても、ずっと想い続けてた。

それももう終わりにしよう。

「兄妹」でもない私たちが会うことはもうないだろう。

またしゃがみこんで、  
足元にあるガーベラをゆっくりと手で撫でる。

そうしていると、どこからかやってきた幼い女の子が、  
私に声をかけてきた。

「それ、ガーベラでしょ？」

「うん、よく知ってるね」

「わたし、おはなやさんになりたいの。ガーベラのはなことばはねー、  
えっと、”ひかりにみちて”だよ。バイバイ」

「バイバイ」

光に満ちた町の風景の中へと、私は歩き出した。

## おっばい

---

十年付き合った恋人と別れた。

世間ではそれを「長すぎた春」と言うらしいが、  
春が好きな私にとって、それは嫌なことではない。  
できれば、春と秋だけでやっていけたらと思うくらいで、  
夏も冬も来てほしくはない。

なのにどうやら、長すぎた春のあとには、  
夏も秋も来ないで、いきなり冬がくるらしい。

こんなことなら、最後に体を求め合うなんてしなければよかった。  
別れは決まっていたというのに、抱き合いながら言った彼の言葉が、  
いまでも頭のなかに雪を降らしている。

「君のおっばいは素敵だ」

それははじめて抱き合った夜に、  
天井を見つめながら、彼が放った言葉だ。  
それを彼は覚えているかどうかは知らないけれど、  
最後の夜にも、そう言ったのだ。

はじめての夜は、人よりちいさい私の胸を、  
そんなふうに言ってくれて感激した。  
少しばかりのコンプレックスを、  
まるごと認めてくれたような気がして、  
それだけで、きらきらがあふれた。

最後の夜にまた、そんなことを言うものだから、  
私はなんとも言えないもやもやが残ってしまったのだ。

もやもや。

あ、そうか、もうきらきらではなく、もやもやになってしまうから、  
一緒にはいられないのかもしれない。  
私はそう考えもしたのだが、頭のなかで降る雪は、きらきらとしている。  
それがもやもやする原因だとも気がついた。

だけど、どうしようもない。

気がつけば、私は彼に電話をかけていた。  
本当にそれは無意識で、その証拠に彼が電話に出たときは、  
はっと我に返り、ことばを失った。

「どうかした？」

彼は何事もないような冷静な声を出した。

その声で私も、冷静になる。

「昨日さ、なんであんなこと言ったの？」

「あんなこと？」

「”君のおっばいは素敵だ”なんて」

「言ったっけ？」

「言ったよ」

「じゃあ、言ったんだ」

「なにそれ、他人事みたいに」

私は諦めぎみにそう言葉を吐いた。

彼に「もう他人よりも遠いはずだけど」と、返され、

私は言葉が見つからず、黙りこくってしまった。

他人より遠いのか。

そうかもしれない。

そういうことかもしれない、別れるということは。

頭のなかの雪がさらさらと吹雪いていくようだ。

彼は、それからゆっくりと言葉を続けた。

「まあ、あれじゃない？ 無意識で思ってることが、言葉になったんじゃない？

本能って、そういうもののような気がするけど」

そう言われると、途端に吹雪はおさまった。

そして、きりきりとまた、雪が降り始めた。

それは彼をまた好きになったからじゃない。

ただ、もやもやがなくなって、

見通しがよくなったということだと、わかった。

「ねえ、また誰かに言うんでしょ、そのセリフ。

こんどは、胸の大きい人だといいねえ」

私は十年來の友達になった気分で、彼にそう言った。

「別に、大きい小さいで好きになることなんてないよ。

わかるでしょ、君が好きだったんだから」

「どうだか」

私は意地悪くそう返してみた。

そのニュアンスを彼もわかったようで、

ちいさく笑う声が、電話口から漏れてきた。

できることなら、他人より遠くにはなりたくない。

難しいかもしれないけれど、他人より、半歩だけ近いと思えたらいい。

私は電話を自分のちいさな胸に当てた。

彼のようにまた誰かが言ってくれるだろうか。

”君のおっばいは素敵だ”と。



# 流れ星

---

「また来たよ、あの子」

ここはぼくらの秘密基地。  
段ボールと木の枝と、レジャーシートをひいて作った、秘密基地。  
出来の悪いテストが隠されてたりする。  
夜には星が流れることもある。  
ここはぼくらの秘密基地。

「あの子、おまえのこと、好きなんじゃねえ？」

仲間がぼくをからかえば、

「な、なに言ってんだよ、そんなわけねーだろ」

赤くなる顔は隠せない。

「つーか、おまえがあの子のこと好きなんだろ」

仲間のつるしあげは終わらない。

「だから、違うってば！」  
「じゃあ、あの子に”好きじゃない”と言ってこいよ」  
「ああ、いいよ。言ってきてやる」

あこのころのぼくらは恋なんて言葉、

「おれ、言えないほうにかける」

テレビの中でしか知らなくて、

「おれも、おれも」

それが恋だってことも、

「やっちゃんは？」

まだ理解もしてなくて、

「言えないほうに、かける」

それよりここにいることが、

「それじゃ、かけになんないだろーが」

ぼくらの全部になっていて、

「ちえっ、つまんねーの」

きみがすぐに消えちゃうことも、

「流れ星だ！」

ぼくらは知らなかったんだ。

見上げる東京の夜空。  
星になったと、誰かが言った。

きみが夜空を流れると、  
ここがぼくらの秘密基地。

## 運命の人

---

ポケットティッシュを街中でいかに差し出されずに通り過ぎるか。  
ティッシュ配りをしているひとをみるたび、それを実行してみる。

配る人のティッシュを差し出すタイミング、  
それを見計らって歩く速さを変える。

重要なのはコースどりだ。  
あまり離れ過ぎてはいけない。

これは自分の中のルールで、  
そうだな、2メートルも離れたらコースアウトということにしている。

常に受け取れる距離にありながら、  
差し出されずに済むというのが美しいのだ。

けれど失敗したら、受けとらなければならない。  
そのときは素直に負けを認める。  
言い訳はしない。

それが武士道だ。

だけど俺はほとんど負けることがない。

たいてい少し前をいくひとに付いていき、  
その人が受け取るタイミングで俺はその後ろを通過する。

それが勝利の方程式だ。

今日も連戦連勝を続けていて気分がいい。

そう思いながら歩いていると、また勝負の時が来た。

俺はいつもの作戦をとる。

少し前の人に付いて行きながら、タイミングを計っている。

「お願いしまーす」

女の声がする。

そういつて、弁当箱を配っている。

いつものことだ……

って、え！ 弁当箱？

なぜに弁当箱！？

俺はそれに吸い寄せられてしまう。

そして、当たり前のようにそれを受け取ってしまう。

「ありがとうございます」

すかさず、彼女に問い詰める。

「なんで、弁当箱？」

彼女はニコニコしながら答える。

「お弁当屋がオープンしたので、宣伝です」

なんて大胆な発想！

「くれるの、これ」

「はい、これを持ってきていただけたら、お弁当詰めますので、よかったら来てください」

「お店どこ？」

「箱の底に地図が書いてあります」

俺は箱をあけて底を見てみる。

確かに地図が書いてあった。

「明日にでも行っていい？」

「はい、ぜひいらしてください！」

彼女は目をキラキラさせている。

「松野さん、最近ずっとお弁当ですね。彼女に作ってもらってるんですか？」

俺の弁当をのぞきこんで、後輩の女子社員がそう言った。

「いや、これは弁当屋の弁当だよ」

「え、でもお弁当箱、使い捨てじゃないですよ」

「これに入れてもらってる」

「へえ、そんなことできるんだ。私も入れてもらおうかな。どこにあるんですか、そのお店」

そう言われて、俺はせかせかとおはんと口につまみこんだ。

そしてまだ、飲み切れていない状態で、ごはんの下の地図を見せた。

「ここ」

俺はひとつだけ嘘をついた。

このお弁当は、あの店のお弁当ではない。

あの店の彼女が作ってくれるのだけど。

そう、あれから弁当屋に通い詰めた俺は、いつの間にか彼女を好きになり、付き合うようになったのだ。

あのとき彼女がティッシュを配ってなくて、ほんとによかった。

なんて思ってるさなか、俺はくしゃみをした。

「あ、ティッシュ持ってない？」

ティッシュも必要なのだけど。

浜名はぼくの唯一の女友達だ。  
14才の時に会って、19才で再会し、  
以来10年近く「友達」として付き合い続けている。

うわべだけなら、  
他にも何人か「友達」と呼べる異性はいるけれど、  
ぼくには確信がない。  
彼女らは、ちゃんとぼくを「友達」と思っているのか。

浜名以外の「女友達」は、  
たいてい、こちらからの電話やメールも返してくれる。  
だけど、向こうからは連絡はない。

社交辞令？

そうかもしれない。

少し、踏み込んだ話をしようとする、  
「そこには入ってこないでください」というのを、  
柔らかくしたような返事が返ってくる。

言わせてもらうが、ぼくは別に下心を持って話してるわけじゃない。  
ただ、ほんとにただ、話したいと思うだけだ。  
彼女らはわかっていないと思うが、ぼくはずいぶんと傷つけられている。  
勝手に傷ついているだけだと、言われるだろうが。

浜名は電話に出ないし、メールも返さない。  
だけど、ぼくは友達だと思っている。  
浜名を抱きたいと思わないし、結婚してしあわせになってほしいと心から願っている。

でも、そうなれば、ぼくには女友達はなくなる。  
だからそうなる前に、こうして飲んでるのだ。  
浜名が誘いに乗るのも、珍しいのだけれど。

「浜名は男友達いる？」  
「男友達のほうが多いよ」

浜名は決して、男っぼい性格ではない。  
ぼくの電話やメールは無視するが、好きな男にはとことん乙女だ。

「そうか」

ぼくはそう言ってビールを一気に飲む。  
そうしたとき、気がついた。

ぼくは、女友達がないというよりは、  
友達そのものが、あまりいないのかもしれない。  
そうなのか、友達が多いと思っていたのに。

今、思い付いた男友達も3人しかいない。  
だけど、その3人は、「友達」という確信がある。  
確信があるのは、いま男女合わせて4人ということだ。

「どうしたの？」

浜名に聞かれる。

「今までさあ、おれは友達が多い方だと思ってた。  
小学校も中学校も高校も、楽しかったし。  
でも、そのときの友達とは、ほとんど会わない。  
社会に出たら、知り合いは増えても、友達は増えない。  
なんでかって言ったら、みんな目的のために生きてるから。  
出世するため、結婚するため、自己実現のため。  
目的に友達はいらぬ。いるのは「同土」。  
友達って、目的のためになるものじゃないもんなあ」

アルコールが一気に回ったのか、ぼくは浜名にそんなことをくだまいた。  
浜名は「ふふふ」とやけに色っぽく笑って、梅酒を飲んだ。

「確かに、目的のために、こうしてるわけじゃないもんね。  
合コンとかいくとき、目的のために生きてるわ、わたし。  
目的のために生きるのもやりがいあるけど、こうしてる時間も、必要なんだだね」  
「じゃあ、友達って多くなくてもいいのかもな。  
おれに社交辞令してくる女って、目的のために生きてて余裕ないんだ。  
かわいそうにな。浜名のほうがよっぽど、かっこいい」  
「かっこいい？」  
「かわいいのほうがよかった？」  
「うん」  
「かわいいよ」  
「ありがとう」

社交辞令とわかっていても、浜名となら、シンプルに笑える。  
世の中の女のほとんどが、浜名のようならいいのに、と思う。  
そのあと少し考えて、それならほとんどの女と恋ができなくなってしまうことに気がつく。  
それはそれで困る。

いつか浜名とも疎遠になる。

そのときのために。

「乾杯しよう」

「なんのために？」

「目的はないよ、友達なんだから」

「うん、そうだね」

浜名、きみはきっとぼくの、最後の女友達。

## スカーレット

---

私は戸叶くんの98%を知っている。

校長先生に、屋上の鍵をもらったこと。  
その屋上で、こっそりウサギを飼っていること。  
そのウサギの赤い目を見てると、泣きそうになってしまうこと。

それだけだけど「それが俺の98%だ」と、戸叶くんは言った。

「じゃあ、残りの2%は？」

「それはまだ、秘密」

真っ赤に染まった夕暮れの校舎。  
グラウンドに響き渡る運動部の掛け声。

もし、屋上に戸叶くんがいなかったら、  
私はここから身を投げたのだろう。

そして、この夕暮れよりも赤く、染まったのだろう。

残りの2%は、「私を好きだということ」だったなら。

そんなことは言えずにただ、  
泣きそうになる戸叶くんの赤い目を、見ていた。

そんなことが、愛しく思えた。



## チェリー

---

桜並木通りを走っているとき、  
助手席の母は不満げに言葉を並べた。

「色が薄いよね。もっと真っピンクの桜がいいんだよなあ」

ぼくは少し薄いほうが好きなので、  
同意することはなく「そう。俺はこれくらいがちょうどいいけど」と、答えた。

「母さんは、もっと真っピンクがいいなあ」

そのこだわりははわからないが、  
「真っピンク」という言葉がストーンとツボに入ってきてしまった。  
そして、バカみたいに大笑いした。

「真っピンクって、変じゃねえ？」  
「え、おかしくないでしょ。真っ黄色とか真っ青とかあるんだし、  
”真っピンク”でもいいじゃない」

”真っピンク”と言葉にされるたび、笑ってしまう。

「絶対、変だって。真っピンクって」

母はピンときていないようだ。

「真っピンク？」  
「ほら、おかしいでしょ？ 真っピンクだよ、真っピンク」  
「おかしくないよ」

ぼくらの会話はまるでかみ合っていない。  
かみ合っていないと思いながら、  
昔読んだ人気作家のエッセイの一つを思いだした。

電車に乗っているとき、隣に若いカップルが座っていて、  
ずっと同じ会話を笑い合っている。  
「あれ、マジうまかったよな」「ていうか超うまかったんだけど」。  
まるで中身のないそんな話を延々と続けて笑いあえることに、  
少し感動すらしてしまうという話だ。

そんな会話を続けられたら、  
この助手席にまだ、彼女は居てくれたらだろうか。

もう少し若かったころの恋が懐かしい。

「いや、変になってくるって、”真っピンク”ってずっと言っていると」

母は律義に「真っピンク、真っピンク...」と繰り返している。

ぼくらの話の中身はない。

「”ラッピング”っていう発音と同じだ」

とぼくは気がつく。  
すると母は、「”接着剤”にも近くない？」と発見したように言った。

「うーん、ちょっと違うけどね」

やっぱりかみ合っていない。

けれど、無心で言葉にしても安心してられるのが、親子なんだなあとぼんやり思う。  
それはたぶん、気づいてないけど幸せなことなんだろう。

フロントガラスに落ちる桜の花びら。

「あ、これくらいのピンクがいいね」

母は一人で納得したようにうなずいている。

その桜は、まさに”真っピンク”だった。

初めて迎えた娘の誕生日。

誕生日にはチーズケーキと決まっている私の習慣に則って、娘もまたチーズケーキでお祝いをする。

「あと何回チーズケーキを食べたら、この子はお嫁に行ってしまうのかな」

生まれたころに父親を亡くし、母親の手で育てられた私には、「父親」という存在がよくわからない。

「父親って、そんなことを思うんだ」

「そんなことを思うのは、はじめてだよ」

そんなふうに、彼は笑った。

思春期のころ、友達は「父親が嫌い」だと、当たり前のように言うようになった。

私は、その意味がよくわからなくて、少しだけ淋しい思いをした。

それは、父親がいないという淋しさではなく、その話がわからないという淋しさだった。

まだなにも確立していなかった私にとって、

友達の話に入れないというのは、とても淋しいことだった。

それと同じ淋しさだと思っていたのに、少し違うかもしれないと気づいてしまった。

「ほんとうに淋しいことは、淋しいと思える相手がないことよ。

だから、おかあさんは淋しくないの。おとうさんがいなくて淋しいと思えるからね」

そんな母の言葉も思春期の私の心を苦しめた。淋しいと思える相手がない。

父親がいなくて淋しいと思えない私は、とても淋しいのだと。

それから、ほんとうの淋しさを見ないように、私は明るく振舞った。

そのとき読んだ何かの本に「笑顔でいればいいことがある」と、

今思えばありふれた言葉が書いてあって、私はそれを頑なに守ることを選んだ。

それは半分当たっていて、半分外れていた。

彼とまだ結婚する前のこと、私と私の友達と三人でお酒を飲んだことがあった。

「どんなところが好きなんですか」

酔った友達はそんなことを彼に聞くので、

そういうのはいいからと話をそらそうとしたのだけど、

彼は淡々と答えたのだ。

「好きというか...淋しい顔をしてるのが、すごく気になって。

笑わせたくなくてね、なんか意地になっちゃって」

彼はそう照れくさそうに言った。

そのとき、無理して笑顔でいた自分のことを、はじめて知った。

うまく笑えてると思っていたのに、私の笑顔は借り物だったのだ。

それを知ってからいつしか彼は、私が無理をしなくてもいい、唯一の人になった。

そしていま、私の娘はそんな彼の、ほっぺたをつねっている。

それをいやがることもなく彼は娘をぎゅっと抱きしめる。

娘は、「は」なのか「へ」なのかわからない言葉で、うれしそうに笑った。

「そういえばね、結婚したときにこれを渡されたんだ、お義母さんに」

彼は押入れからビデオテープを取り出したあと、私にそんなことを言った。

「お母さんに？」

「子どもが生まれたら、その子の初めての誕生日に、一緒に観てくれって」

ビデオデッキにテープを入れた。再生されると、画面に赤ちゃんの映像が流れた。

「今日は、ゆうちゃんの1才の誕生日で一す」

母の声だ。画面に映るのは、赤ちゃんの私らしい。

丸いケーキがテーブルの上にあり、ケーキには一本のローソクが立っていた。

「おまえもいつか、お嫁に行くんだな」

その言葉が聞こえて、カメラは見知らぬ男の人を映した。

「これって、お義父さん？」

彼が聞くけど、「うん、たぶん」としか答えられなかった。

写真では見たことがあるけれど、それがイコールこの人なのかと、

私には結びつけられなかった。

「ははは、うちのお父さんもそんなこと言ってたかも」

母が笑っている。

「来年はチーズケーキでお祝いだな」

「チーズケーキ好きだねえ」

私の誕生日がいつもチーズケーキだったのは、そういうわけなのか。

ビデオの中の父親は笑顔だったけれど、ふいに涙がひとつぶだけ落ちたように見えた。

赤ちゃんの私は、それを拭おうとしている。でも、うまく触れなくて、つねってしまった。

いてっ。と、父親は声を出した。

「でも、痛いってことは、まだ生きてるってことだな」

ビデオは、そんな家族の風景を何分か映した後、やがて砂嵐に変わった。  
彼は私の顔を見ている。何か言われると、泣きそうで、

「あのさ、私のほっぺた、つねってみてよ」

と、先に言った。

「お、ほっぺた、つねってほしいんだって。ほら、かあさんのほっぺた、つねってあげな」

彼は娘にそう言って、娘を私の顔に近づけた。  
娘はぎこちなく私のほっぺたに手を近づける。  
そして、ぎゅっとするのかと思いきや、ゆっくりなでた。

「あれ、なんだよ、つねらないのかよ」

夫が文句を言っている。

「すべすべだから気持ちいいんだ、きっと」

俺だってヒゲそってすべすべなのに、と、わけのわからない反論をして、  
夫は、私のほっぺたをつねった。

ちょっと痛かったけれど、それが生きてるってことだと思うと、うれしかった。

## 恋は夕暮れ

---

「自分をコントロールできないものはきらいだ」

「たとえば？」

「たとえば、恋だ。あれはだめだ。感情というのだって、脳の仕組みで説明できる。なのに、それを止めることはできない。わかっているのに、できないなんて、そんなこと俺の人生にはなかったはずだ」

「つまり、恋をしてるのですね」

「なあ、ユキムラ、俺は恋をしてからというもの、自分をコントロールできなくなっている。俺が、こんなにもビールを飲む日があったか。いや、ビールは飲むこともある。だが、どんなに飲んでも、5杯以上は飲まない。それが俺のルールだ。それがどうだ、いまはもう6杯目に差し掛かっている。これはどういうことだ」

「それが恋だからです」

「恋とは、ビールを6杯も飲むことなのか。なあ、ユキムラ、俺の愛読書を知ってるか」

「カントの”純粹理性批判”です」

「その通り。自由とは、欲求に対して、正しく心をコントロールすることだ。いまの俺は因果律に支配されて、心をコントロールできない。いつから俺はこんなに不自由になってしまったんだ。ああ、あいつの気持ちがまるでわからない」

「人間にはわかるものとわからないものがありますから」

「わかるものと、わからないものか。つまり俺にはあいつの心を理解するのは不可能というのか」

「それはわかりませんが、ただひとつ、先輩は恋をしているということは、本当です」

「ああ、また振り出しか。もう7杯目だぞ、いいのか、ユキムラ」

「いいと思います」

「いいのか。それなら最初はどうすればいい。ドライブか」

「いいと思います」

「レンタカー借りるぞ、ユキムラ。それならプリウスか、燃費もいいしな」

「軽でいいんじゃないですか、安いし」

「そうか。色は？」

「色？」

「情熱的に攻めるなら、赤か。赤には興奮する効果があるというしな。

いや、そんなことしたら、運転に支障が出るかもしれないな。

青だ。青には気持ちを落ち着かせる効果がある。

そうだ、青だ、心をコントロールできるじゃないか！

自由だ、俺は自由になれる！ やったぞ、ユキムラ！」

「おめでとうございます」

誰かを好きになるということは、

とても不自由になるということだ。

それをわかっているのに、

あえて不自由になろうとする。

「ユキムラ、おまえは、自由か？」

「とっても不自由です」

先輩が好きだと、私は言えない。

# 僕の天使マリ

---

あれはたしか、10才になったばかりの秋のことだ。

ぼくは同じ野球クラブのヤスタカという友達と、  
すすきの生える国道353号線の河川敷で、キャッチボールをしていた。

ふざけて野茂のフォームを真似て投げたヤスタカのボールは、  
すすきで作った秘密基地の中に入っていった。

そこは、ぼくとヤスタカの二人で作った、ぼくらだけの場所だ。  
ボールを取りにそこに向かうと、知らない誰かがいた。

もしもそれが子供なら、「なにしてんだよ！」と声を荒げたと思う。  
だけどぼくが見たのは、おじいさんだ。  
ぼくはおじいさんにおそろおそろ声をかけた。

「あの、ボール……」

おじいさんは、背を向けたまま、ボールを拾った。

「ここは、おまえの秘密基地か」

おじいさんはボールを返さず、そう言った。

「うん、そうだけど。おじいさん、誰？」

「おれか。おれはなあ、天使だよ」

「天使？ ただのおじいさんでしょ？ とにかく、ボール返してよ」

勝手に秘密基地に入られたうえに、  
わけのわからないことを言うおじいさんに、  
ぼくは少しイラついた。

「まあ、無理もない。天使って言ったら、  
羽を付けた、純粹無垢な子供だと相場が決まってるもんな」

「だから、はやく、ボール返して」

「だが、そうでもないのだよ、少年よ。

天使は人間とそう変わらない生活をしている。

人間と変わらない、悲しみ、喜びを感じている」

まったくぼくの言葉は無視だ。

天使はどうやら、マイペースみたいだ。

それでもぼくは怯まない。

「だーかーらー、ボール、ボールを返してって！」

「そこまでいうならわかった。羽を見せようじゃないか」

「聞いてる？ 羽じゃなくて、ボール……」

おじいさんはぼくの言葉に関係なく、服を脱いだ。  
そして、ぼくは言葉を失う。天使の羽がそこにあらわれた。

そうすると、おじいさんは満足した様子で服を着て、立ち上がった。

「未来で待ってる、天使がいるぞ。会いに行け」

おじいさんは秘密基地をあとにした。  
手に、ボールを持ったままだ。

「だーかーらあー、ボール！」

\*

車で353号線を走っているとき、  
助手席の彼女はふいにつぶやいた。

「なんだかここ、懐かしい感じがする」

ぼくは彼女と結婚をする予定だ。  
その報告をしに、彼女をつれて実家へと向かっている途中だった。  
懐かしい感じがするといったその場所で、ぼくは車を止めた。

「すごいね。一面、すすきだ」

車を降りて、彼女はそう、声をあげた。

「ここで昔、天使に会ったよ」

「え？」

「なかなかボールを返してくれない天使なんだけどさ」

「なにそれ」

「そのとき言われたんだ、未来で待ってる天使がいるから、会いに行けって」

「だいじょうぶ？ なにか変なものでも食べた？」

「それ、マリのことだったんだね」

「え？」

「もし違っていても、そういうことにしようと思うんだけど、



マリの家に行ったとき、古い野球のボールを見つけた。

そのボールは、天使が持っていったボール。

その天使は、マリのおじいさん。

そういうことにしようと思うんだけど」

「違うって言ったら？」

「まあ、違うとしても、俺にとってマリは、天使なわけだよ」

少しノスタルジックな気分だったせいか、

そんなことを言ってみると、彼女は服を脱ぎ出した。

ぼくはあわてて「おいおい」と彼女の身を隠そうとすると、

彼女は背中を向けて、小さな羽をぼくに見せた。

それはすすきのように白い色をしていた。

「天使だけど、結婚してくれるの？」

「服着たら答えるから、はやく着ろって」

そう言ってぼくは服を着るように急かした。

そりゃそうだ、まわりに人がいないといっても、

それはちょっと、モラルに反する。

勝手に秘密基地に入っちゃうおじいさんの遺伝か。

とにかくちゃんと服を着たなら言うつもりだ。

ぼくがマ리에会いに来たんだよ、と。

## 田舎の生活

---

人が倒れている。

バス停の前。

畑で、じゃがいもを収穫していた私の手が止まる。  
私は気になって、バス停の方へ歩き出した。

ふと、死んでたいらどうしようと思い、鼓動が速くなった。  
そして、歩く足が止まった。

あのときのように、また世界の終りを迎えてしまわないか.....

いや、でも、とくにかく安否を確認しなくちゃ。  
また私は足を前に進めた。

バス停の前に着いた。  
倒れているのは男の人だ。  
うつぶせになっているが、  
横を向いた顔に、髭があるのを確認できた。

私はおそるおそる声をかける。

「あのう.....」

反応はない。

もう一度声をかけ、上体を手で揺すってみる。

すると、道が少し斜面になっているためか、  
その人はくると回って仰向けになった。

え？ 死んでる？

そう思った刹那、その人は目を開けた。

「うわあ！」

思わずそう大きな声を出してしまうと、その人も同じように、びっくりした。  
そのあと、「だ、だれですか？」と、私に向かって言った。

「あ、いえ、倒れてるのかと思ったので」  
「え？ ああ、寝ただけです。あ、あれ？  
ベンチで寝てると思ったのに。オレ、寝相悪いんですよえ」

その人は頭を搔いて笑った。  
その笑顔は私よりあきらかに若い。  
おそらく20代だ。  
もうすぐ40才の私とは、無邪気さがまるで違う。

「轢かれますよ、こんなところで寝てたら」

そう忠告すると、その人はぐうーっとお腹の虫を鳴らせた。

「あ、すみません」

また、同じように無邪気な笑顔をみせた。

「ちょっと待ってて」と私は言って、畑に戻り、じゃがいもを手を取った。  
そしてバス停に戻り、その人にそれを手渡した。

「そのままじゃ食べられないけど、よかったら」

「いいんですか、すみません。なんかうまくいきそうだな、プロポーズ」

その人はそうつぶやいた。

「プロポーズ？」

「はい、オレ、彼女と遠距離恋愛中なんですけど、  
今日会ってプロポーズしようと思ってるんですよ。  
指輪じゃなくて、このじゃがいもあげようかなあ」

また同じように無邪気に笑って、頭を掻いている。

私は、夫がプロポーズしてくれた日のことを思い出した。

私にじゃがいもを差し出し、「ここでぼくとずっと、暮らしてください」と言ったのだ。

「じゃがいもでプロポーズする人なんていないよ」と私は笑って、そのじゃがいもを受け取った。  
半年後、式を挙げる日の1ヶ月前に、彼は不慮の事故で亡くなった。

じゃがいもではなく、指輪ができあがりましてと、  
オーダーメイドのジュエリーショップから連絡があったのは、その1週間後のこと。  
それはネックレスになり、今も私の胸元で輝いている。

「うまくいくと、いいね、プロポーズ」

「ダメだったら、ここに倒れてるかもしれないので」

「そのときはまた、じゃがいも、あげるから」

バスが来た。

その人は私に頭を下げて、バスに乗り込んだ。

扉が閉まり、ウィンカーが点滅する。

バスはゆっくり走り出した。

私はまた、畑に戻る。

少しだけ何かを期待してる私は、  
そうか、こんなにも時が流れたんだなあ、と、  
じゃがいもを手にしながらか、思っていた。

## ミーコとギター

---

彼女はセンスで生きている。

そのファンションセンスはバリコレかと思わせるし、  
恋人は「空間デザイナー」という肩書の、さわやかな男。

自身はイラストレーターで、2ヶ月に1度は個展を開く。  
開いてないときの1ヶ月は、フリーマーケットに出向き、  
古着を縫い合わせて作ったカバンや、手製のアジアンテイストなアクセサリーを売る。

俺と彼女はそんなフリーマーケットの会場で出会った。

彼女の作ったカバンやアクセサリーを、通りすがりに見てたとき、  
その後ろに立てかけてあるそれに、目を奪われた。

「それ、三千円ですか？」

そう聞くと、彼女は「買います？」と笑顔で言った。

「ちょっと触らせてもらってもいいですか？」

「だめです。買ってくれるならいいです」

それは俺の知っている限り、定価では10万はするであろうアコースティックギター。  
それを三千円で売るなんて、ニセモノなのか。  
それとも価値をわかっていないだけなのか。

まあ、でもいいか。たとえニセモノでも、壊れかけでも、三千円で手に入るならもうけものだ。  
そう思い、財布の中から三千円を取り出した。  
そうすると、彼女は付け足すようにまた言ったのだ。

「ギター、弾けるんですか？」

「ええ、まあ」

基本的なコードを適当に鳴らすことしかできないのだけれど、  
弾けないというわけではない。  
まあ、弾けないとしても、なんとなくポロンポロンと鳴らしてるときの感覚が好きなのだ。

「じゃあ、弾き方、教えてくれるなら、売ってもいいですよ」

「え？ あ…… 教えるって言っても……」

「教えてくれないなら、売りません」

あまりにはっきりと言う彼女に、思わず口答えをするかのように、  
「じゃあ、教えます」と、俺は即答した。  
それほど、そのギターを欲していたのだ。

そうやって、手に入れたギターで、彼女に弾き方を教えることになった。

場所は、フリーマーケットの会場になった公園。  
その公園でいつのまにか路上ライブを始めるほど、  
あっという間に、彼女のギターはうまくなった。  
彼女はあこがれてしまうほどに、センスの塊なのだ。

「ねえ、結局このギター、私が使ってるんだけど、いいの？」

しばらくして彼女はそんなことを言った。

「いいよ。俺、君の弾くギター、好きみたいだし」  
「そうなんだ？ でも、ほんとはこのギター、使いたくないんだ」  
「どうして？」

彼女は少し神妙そうに「昔の彼氏の形見だから」とつぶやいた。  
「昔の彼氏」ということは、今の「空間デザイナー」の彼氏ではないということだ。  
形見？ ということは、死んでしまったのか。俺は「そうか」と唇をかんで、言葉を返した。

「これ見ると、いろんなことを考えちゃうから、売っちゃおうかなって。  
すごく高いギターだったみたいだけど、あんまり高いと誰も買ってくれないと思って、  
三千円にしたんだけど、いざ、「買う」って言われたら、やっぱりさびしくて……  
それで、“教えてくれ”って言ったんだ」

彼女は確かめるような口ぶりで、言葉を並べた。  
俺は「そうか」と返ししながら、何度かうなずく。

「でも、そう言ったら、“やっぱりいいです”って言われて、  
それでほっとしてたんだよね、わたし」  
「じゃあ、俺だけだったの？ 教えるって言ったの」

そう聞き返すと、彼女は小さく息を吹き出しながら「そうだよ」と笑った。

「今の彼氏に教えてもらえばよかったのに」  
「今の彼は弾けないし。それに、わたし、たぶん……  
このギターの彼氏以外、ちゃんと愛せそうにない」

“このギター”というのが、昔の彼氏のことをさすのか、  
それとも、俺のことをさすのか、と、少しバカなことを考えてしまう。

「そうか」

相変わらずそう相槌を打つだけで、  
そのことを聞くことはできなかった。

そうしてると彼女はまた、“このギター”で、  
優しい恋の歌を歌った。

ごまかすように、俺もその歌を口ずさむ。

彼女の気持ちに色がつくことを、俺は心から願った。

## 魔女旅に出る

---

まったく子どもってというのは、無力だ。

まだ隣の県に行くだけでも大きな何かを超えた気分になるというに、山梨から北海道はあまりにも遠すぎる。

あの、こもった空気の中で、「ほうとう」はもう食べられない。

「ジンギスカンっていう羊の肉の料理があるんだぞ。それがまたうまいんだから。な？」

父さんは何かを確認するようにそう言ったけれど、まったくもって勝手だ。

「父親の仕事の都合で」。  
ありきたりのキーワードで転校してきたぼくは、その冷たい気温が心まで届くように、とにかく淋しくて仕方なかった。

そんな淋しさが消えないまま、それっぼい挨拶を終えて、指示された席に座る。

となりの席の女の子は、「よろしく」と小さく会釈をした。

ぼくも「よろしく」と遠慮がちに返すと、女の子はニコッと笑った。

少しだけ淋しさが和らいだ。  
それから何もなかったかのように、授業がはじまる。

ぼくはあまり集中ができず、窓の外を眺めたりした。  
空にほうとうが浮かんだりしながら。

それを見ながら、片手で机の中に手をやる。  
なんとなく不安なときはいつもそうするのだ。

そうしてると、机の裏側に何かが張り付いていることに気付いた。

箱の中身はなんだろうな、みたいな気持ちになる。

細長い長方形の、、、封筒？

ぼくはそれを剥がして、目で確かめた。

”拝啓、転校生様”

そんな表題が書いてある。

となりの席の子に聞いてみる。

「ねえ、おれが来る前、誰か転校した？」  
「うん、ちょうど入れ替わりで、転校した女の子がいたよ」

そうか。その子が置いていった手紙か。

ぼくはそれを家に帰ってから読むことに決めた。

家に帰ると、待っていたかのように母親が声をかけてきた。

「どうだったー？ 学校」

「ああ、まあ、楽しかったよ」

母親には安心してほしいので、適当なことを言っておいた。

「そう。よかった。それにしてもこっちは寒いねえ」

「そりゃあ、北海道だし」

ぼくはまた適当なことを返して、自分の部屋に入った。  
早く手紙を読みたかったのだ。

「きょう、ジンギスカンだからー」

そんな声が聞こえた。

ほうとうが食べたいというのに。

またそんな気持ちになりながら、手紙の封を切ってみる。

拜啓、転校生様

はじめまして。あなたは誰ですか？

あなたの名前がわからないので、私の名前も言いません。

と言っても、クラスの子に聞けばすぐにわかることでしょう。

だから書かないことにします。

って、まわりくどいですね。ごめんなさい。

そんな出だしで手紙は始まり、

その後もまわりくどく遠慮がちな文章が続いていた。

このクラスが好きなこと、

転校したくないこと、

新しい場所は不安なこと。

あなたは、どうですか。

あなたも不安ですか。

転校したくなかったですか。

答えは聞けないけれど、

あなたはそんなことないと笑っていたら、

なんだか少しうれしいです。

ぼくはそのまわりくどい手紙をなんども読み返した。

寝そべりながら、椅子にすわりながら、頬杖をつきながら。

そして最後の1文を読んだとき、



それがどんな意味を持っているかわかった気がした。

ところで、ジンギスカンはおいしいです。  
いつかまた、食べたいです。

ぼくはこの子に、ほうとうを食べてもらいたい。  
いや、正確に言えば、一緒に食べて笑いたい。

どうやら、これは恋なのだ。  
会ったこともないけれど。

ぼくはその手紙に返事を書くことにした。

”拜啓、転校生様”

あなたは誰ですか？  
ぼくのこともしっかりあなたの友達から知ったりするでしょう。  
だから名前は言いません。  
って、ぼくも真似してまわりくどく書いてみました。

そんな出だしで書き始める。

同じように不安だけれど、笑っていることに決めたこと、  
とても寒いけれど、クラスメイトはあたたかいような気がする。

そして最後に、

山梨のほうとうはおいしいです。  
いつかまた食べたいです。

そう書いてみた。

ぼくに、この子の住所を聞く勇気があるだろうか。

とにかく今日は、ジンギスカンを食べることにしよう。

そう思って、部屋のドアを開けた。

# うめぼし

---

子供の時から、緊張してる時は、うめぼしを食べたくなる。

うめぼしを食べたくなってるのは、緊張している証。

ほんとうは勉強するつもりだったのに、  
気が付いたら、電話の子機を握りしめている。

「この冬がんばらなくて、いつがんばるんだ」

春も夏も秋も、いつだってがんばれと言ってるくせに。  
受験生には、がんばらない時間はないらしい。

がんばれって、便利な言葉。

たぶん、「おはよう」や「いただきます」くらいのオートマティズム。  
ふだんはそんなふうなあまのじゃくなぼくでも、いまならわかる。

”いま、がんばらなくてどうするんだ”

子機は汗ですべりそう。

汗が流れ込んで、なんらかの重要な回線が、  
機能不全になってしまわないものか。

そうしたら、ぼくがあの子に電話する理由もなくなるのに。

そもそもなんで今日、告白しなくちゃならない？

ただ好きで、好きで、もう心がつらいから。

今日じゃなくてもいいけど、  
今日すると決めた。

いまがんばらなければ、勉強だって手につかない。

ああ、これが、恋なのか。

そんなこと考えてると、  
ますます緊張してきて、うめぼしが食べたくなくなってくる。

でも、いま台所へ行って、  
うめぼしを食べてるところを見られたら、  
「なにかあったの？」と、母が心配してくるに違いない。  
ぼくのうめぼし体質を、母は誰より知っているのだ。

大事なテストの前も、大事な試合の前も、  
じいちゃんが死んで泣きじゃくってたときも、  
母は、うめぼしを差し出した。

そうすると、不思議とぼくは落ち着くのだった。

ああ、うめぼしたべたい。

うめぼし食べて、きみに好きと言いたい。

※うめぼしたべたい、きみが好き。

うめぼしたべたい、きみが好き。

※くりかえしx∞

## 晴れの日がプカプカプー

---

”むしようにアジフライ”

自転車をこぐリズムが、その言葉とうまく合う。  
ただそれだけの理由で、何万回とそれを心で唱えた。

”何万回”は言い過ぎだろうか。  
何千回に修正しておこう。

とにかくそれくらい唱えていたということだ。

ぼくのクラス（1年5組）では、  
毎朝、その日の日直がみんなの前で「1分間の話」をしなくてはならない。  
別に「深くてイイ話」や「トリビア」でなくてもいいのだが、  
ぼくらの机には、「深イイレバー」と「へえボタン」が用意されている。  
わざわざ担任がぼくらの人数分注文してそろえたそうだ。

どんな話でもいいというのだが、  
そのレバーやボタンがあるゆえに、  
ぼくらはやけに「深くてイイ話」や「人生には必要のないムダ知識」を話したくなった。

たとえば、昨日の田中さんの話には、みんな感動した。  
田中さんには、パン屋で働くお姉さんがいるのだが、  
そのパン屋さんで、よく話をするようになった男性がいるという。  
その男性は仕事柄、出張が多いのだそうだが、  
出張から帰ると、いつも決まって「四葉のクローバー」を渡してくれるのだという。  
男性には妹がいた。その妹は10万人に1人という割合の病気にかかっていた。  
男性は妹に四葉のクローバーをあげる約束をしていた。  
でも、その約束を果たせないまま、妹は死んでしまったのだ。  
その妹に、田中さんのお姉さんはそっくりだったという。  
男性は、罪滅ぼしのためか、お姉さんに四葉のクローバーを探して、あげ続けたのだ。  
四葉のクローバーが自然界に存在する確率は10万分の1。  
それを探し続けて、あげ続けた彼に、お姉さんはプロポーズした。

という、ロマンチックな話だった。  
みんなはそれに感動で、「深イイレバー」も「へえボタン」も押すことができず、  
やがて、拍手が巻き起こった。  
ぼくももちろん感動して、スタンディングオベーションをしたくらいだ。

そんな話の次の日に、「むしようにアジフライ」だ。  
ぼくの話は田中さんの話とは違った意味で、フリーズされてしまった。

「心で唱えたアジフライの数だけ、アジと玉子のとむらいを、しなきゃなあと思ったりで」

そう付け加えて、話を終わらすと、田中さんがひとり「へえボタン」を押した。

その間が絶妙におかしな空気を生んで、教室は爆笑に包まれた。  
ぼくは、少し、ほっとして、頭を掻きながら席に座った。

帰り道、公園のブランコに田中さんが座っているのを見かけた。  
ぼくは引き寄せられるように自転車を降り、近づいて、隣のブランコに座った。

「間違えちゃった」

ぼくに気づいた、田中さんはそう言った。

「間違えたって？」

「ほんとは、"深イイ"にしたかったんだけど」

どうやら、今朝の話のようだ。

「ああ、でもあのおかげでなんかウケたし、よかったよ」

「うん、でも、ほんとにいい話だと思ったんだよ」

"むしようにアジフライ"のどこにそんな要素があったのかわからず、ぼくは困ってしまって、今朝の言葉を唱えた。

「むしようにアジフライ」

続けて田中さんは言った。

「アジと玉子のとむらいを」

そう言った田中さんのほほをなでる髪に見とれてることに気がついて、ふっと目を逸らした。

逸らして戻した視線の先、  
ブランコの真下で目が合ったのは、  
四葉のクローバーだった。

ぼくはそれを摘み取って、彼女に渡した。

「え？」

「じゃあ」

ぼくは恥ずかしくなって、その場を離れた。

自転車にまたがり漕ぎ出すと、  
プカプカプー、プカプカプー。  
こんどはそんなふうに唱えていた。

プカプカプー、プカプカプー。

「いっしょに帰ろう？」

田中さんが追いかけてきて、声をかける。

「プカプカプーだ」

と、ぼくは答える。

「え？」

「なんでもない」

「気になる」

君が好きだと言えないぼくの、  
代わりの言葉、プカプカプー。

この気持ちのとむらいは、

まだできそうにないと、ぼくは思う。

プカプカプー、プカプカプー。

## 恋のエチュード

---

ただトラックを何周も何周も走りつづける彼を、私は見ている。  
「見ている」という表現は、多分間違っていて、それは、「見惚れている」に近い。

友達はそのを、恋だとはやしたてるけれど、  
私と彼との間に、そんな大きな川は存在しない気がする。

確かに、「見惚れる」という字の中には、  
「惚れる」という言葉が混じっているのだけど、  
これは恋とは違うと思う。

たとえば、夕焼けとか、雪景色とか、  
たぶんそういうものを見るとき気持ちなんだと思う。

「見てるだけでいいの？」

友達の言葉に私は戸惑う。

「夕焼けを見るとき、他に何かいる？」

そう答えてみる。

「彼は、夕焼けなの？」

と、聞かれると、即答はできないのだけど。

「彼は彼だけど、夕焼けではないけど、そういう感じなの」  
「たとえばケーキではないわけね？」  
「ケーキ？　なんでケーキなの？」  
「ケーキを見てたら、食べたくなるでしょう？」

それって、彼を食べたくなるかどうかってことなのか。  
そんな想像をして、私はかーっとほほが熱くなった。

「ケ、ケーキなんかじゃないよ」

あわてて否定してみると、  
友達はニヤニヤ笑って、

「やらしい想像したくせいにー」

と言った。

彼はケーキなのかな。  
たとえば彼に、ぎゅっとされたいのかな。

そう考えて、ドキドキしてみるけれど、  
でも、それでも彼を見ると、私はただ見惚れてしまっていた。

「ケーキ、ケーキ言うから、甘いもの食べたくなってきたよ」

私が話をそらすと、  
友達のお腹がぐーっと鳴った。

ちょっと間があいてから、  
私たちは顔を見合わせて笑った。

そんなふうな私を知らないまま、  
彼はただトラックを走ってる。

「先、行ってるからあとから来てよ」

うん、と答えて、また彼に見惚れる。

夕焼けと溶け合う彼のすべてが美しすぎる。

いつのまにか涙がこぼれた。

彼の見ている世界に、私がないとしても、  
私は彼を、ながめていたい。



## 水中メガネ

---

彼の車のダッシュボードには、私の水中メガネが入っている。  
海やプールで使ったことはない。

ただ、彼と一緒に暮らすため、  
リサイクルショップをまわっていたときに、  
一目ぼれして、買っただけ。

少し、黄金色に色付いている。  
きっと、おもちゃの水中メガネ。

助手席に乗っているときに、ときどきそれを取り出して、  
いたずらにかけてみたりするだけの。  
それだけの水中メガネ。

「好きだね、それかけるの」

あきれたみたに笑う、彼。

「うん、気に入ってるの」

「1回くらい、スキューバでもしてみる？」

「やだ。私、泳ぐの得意じゃないし」

「そうか、もったいないな、似合ってるのに」

信号待ち。隣の車も、信号待ち。

水中メガネの私を見られた。

あっけにとられた顔して、軽く会釈をされたのだ。

あわててそれを外したら、彼は笑って、私の頭をなでた。

「笑われた？」

「うん」

「似合ってるのにね」

「でも、泳ぐの得意じゃないからね」

私の部屋の本棚の上、水中メガネが置いてある。

それを付けてみるけれど、頭をなでてくれる彼は、もういない。

鏡でその姿を見てみると、ちっとも似合っていなかった。

「似合っていないじゃん」

黄金色の部屋の中、思い出の波が押し寄せる。

「いま、息継ぎの仕方、忘れてた。ドキドキしすぎて」

キスしたときに、言った彼。

「たまに、子供みたいになるのね」

まあね、と言って眠る彼。  
泳ぐのが得意じゃない、私。

今度は教えてほしいのに。

息継ぎの仕方は、どうするの？  
1回くらい、スキューバしとけばよかったな。  
泳ぐの得意じゃないけれど、これから泳いでいかなくちや。

## スピッツ！

<http://p.booklog.jp/book/25782>

著者：ゆひ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuhibook/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25782>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25782>